

(3) 各地活動場所 福島県…国見町、福島市、伊達市、郡山市、須賀川市、相馬市、新地町、いわき市など 岩手県…

山田町、釜石市、大槌町、陸前高田市、宮古市、野田村など 宮城県…亘理町、山元町、石巻市、気仙沼市など。

(4) 第一八期全曹青スローガン「いのちの声に耳を澄ます」のもとに、全国曹青会員の慈悲行の実践と深化を具現化するため、当該期基幹事業である、電話相談員養成研修会の企画運営と電話相談窓口「観世ふおん」の開設運営を主管。「観世ふおん」については、現在（平成二五年二月）も継続

事業として、相談窓口の開設運営、各種研修会などが実施されている。

(5) 平成一二年度『日本赤十字社の心理的支援マニュアル』を主に引用、一部改編。

(6) 宗教的傾聴 殊更に宗教者の立場を掲げず、その信仰心が静かに滲む姿勢。被災者のところに留まらず、いのちの気づきを静かに促す鏡の存在。また、善悪だけにとらわれない仏教的価値観の提示による対話。

支援する宗教者

東日本大震災と「励ましの絆」

— 創価学会の救援活動について

創価学会宮城県青年部長／宮城復興プロジェクト・リーダー

山根幹雄

やまね みきお

「もしかしたら、このまま建物が倒壊して死んでしまいかもしれない」。地震発生直後、これまでに経験したことのない激しい揺れの中で感じた私の実感です。東日本大震災が発生した二〇一一年三月一日、私は勤務する仙台市内の創価学会東北文化会館にいました。三分間余りの揺れは本当に長く感じられ、揺れが収まった瞬間、一斉に機械類の警告ランプが点滅し、ブザーが鳴り響きました。私は「災害対策本部を立ち上げます！」と叫び、ただちに東京の学会本部と電話交信。ボイラーをはじめとする機械などの館内点検、在館者に怪我人がいないかを確認すると同時に、県内各会館の状況掌握に全力を尽

くしました。

しかし、各地の会館とはなかなか連絡が取れません。県内では、気仙沼と石巻の会館が津波に襲われていました。地震発生から約二〇分後には東北文化会館に最初の避難者が訪れました。やがて多くの近隣の方々が次々に避難してこられ、午後一時ごろには館内の避難者の数が三百人にも達していました。

最終的に今回の震災では、会員、非会員を問わず東北文化会館に千人、県内一四会館では三千人の方々を受け入れ、学会全体としては四二会館で最大五千人の被災者を受け入れました。

その後、避難所としての東北文化会館の運営は約一月半続きました。運営に当たった私たちの思いは「避難されてきた方の安全と健康だけは、絶対に守りたい」との一点でした。しかし、電気・ガス・水道というライフラインが止まり、大震災の混乱によって行政からの支援助物資も望めません。どうしたら避難者の皆さんの安心と安全を確保できるのか、非常に悩み、心を尽くしました。

その第一は食料の問題です。三百人もの避難者の明日の食事をどうするかに思い至ったのは、震災当日の午後一時すぎになってからでした。ひとまず職員用食堂にあった無洗米を使い、非常用電源で八個の電気釜をフル稼働しておにぎりを作ることにしましたが、近隣の会員から提供してもらった家庭用炊飯器で作られるおにぎりの数は一つの釜で一五個程度。身を寄せてこられる被災者の数は一刻と増える一方です。会館の管理者や職員、避難してこられた地元の方が徹夜で千個の小さなおにぎりを作り、翌朝までになんとか間に合わせることをできました。

隣県の学会の組織も迅速に動いてくれました。震災発電灯を持ち、真っ暗な会館の中で防寒着を着て交代で洗面所の入り口に常駐。二四時間体制で使用法の説明に当たりました。

館内の衛生環境にも気を遣いました。寒い時期でしたので風邪やインフルエンザなどを蔓延させてはならないと、アルコール消毒やマスクの着用なども徹底。避難所生活三日目から一日のスケジュールを張りだし、「食事」「ラジオ体操」「換気」「清掃」などのリズムを作りました。度重なる余震で不安にかられる避難者の皆さんに、「おはようございますー」「お体は大丈夫ですか」と笑顔で声をかけ、少しでも気持ち安らぐようにしました。食事を取っていない方、高齢でラジオ体操に参加できない方、家族の安否が分からずに苦しんでいる方には、特に声をかけるよう心がけました。医師や看護師のメンバーに協力を要請し、健康相談も開始しました。

震災後、日増しに想像を絶する甚大な被害状況が明らかになるにつけ、私自身、何度も無力感に襲われました。なぜ東北でなければならなかったのか。そこに住む人々

生から一二時間後の一二日の午前二時すぎには、山形から緊急支援助物資の第一便が寸断された交通網を縫うようにして届きました。おかげで早朝には、おにぎりの他に、水やソーセージなども用意することができました。

新潟から五五〇〇個ものおにぎりが届いたのは、震災翌日のことでした。二〇〇四年に中越地震、二〇〇七年には中越沖地震を経験している新潟のメンバーは、こちらからの要請を待たずに、重油や飲料水、パン、簡易トイレなどの支援助物資をピストン輸送で何度も届けてくれました。大きさは形が違う手作りのおにぎり、そこに添えられていた「負けないで」「頑張って」「私たちも祈っています。共に、乗り越えていきましょう」との言葉には、スタッフ全員が目頭を熱くしました。全国各地から送られてくる支援助物資や手紙、そこに込められた真心が、精神的にも肉体的にもギリギリのところまで踏ん張っていた私たちの活力となりました。

食料とともに大変だったのはトイレの問題です。館内に災害用の簡易トイレを備蓄していましたが、使い方が分かる避難者はほとんどいません。このため職員が懐中が、また大切な我が同志が、なぜこれほどの苦しみに遭わなければならないのか。大切な家族を亡くさなければならぬのか。不条理と言えばあまりに不条理な現実、言いようのない悲しみで胸が張り裂けそうになり、何度も涙し、心が折れそうになった時もありました。

震災から二年が経った今も、被災地の状況は変わりません。掛け替えない家族を亡くされた方を前に、励ます言葉が見つからないこともしばしばです。どこまでも一人一人の心の声に耳を傾け、苦しみや悲しみに寄り添い続けるなかで、少しでもその人が勇気と希望を持って人生を前向きに生きていけるように励ましていくしかないのではないかと思っています。

私達の活動には、一方が救援し励ます側で、もう一方が救援され励まされる側といった固定的な関係はありません。励まされた側が立ち上がり、今度は励ます側に回っていくという励ましの連鎖が生まれています。

石巻市の配管工のKさんは、震災当日、津波にのまれ、松の木に捕まって九死に一生を得ました。これまで会社の倒産を三回経験し、二〇〇五年に独立。震災の一年余